



同窓会だより

同窓会新執行部の挨拶

同窓会会長 神田 正 一（3期）



今年4月の総会において、再び会長として同窓会会務の執行に当ることとなりました。2期目となり、少し落ち着いて、皆さんの意見を聞きながらやっていきたいと思っています。大学側からは、野

村修一先生に副会長として入っていただき、大学内の様々な情報を聞かせていただいたり、ご協力をお願いしております。又、新しく理事や委員をお願いした方々にも、それぞれの部署での仕事をさせていただくことになりました。

我々の同窓会も、1600名を超える会員数となり、全国各地で活躍している会員が多く頼もしい限りです。全国の歯科大学及び医科大学の教授として、教育、研究に携わっている人、行政の分野で頑張っている人、各地の歯科医師会で活躍している人、それぞれの場で、貢献している同窓生の話を知ると、本当に心強く思われます。

さて、今年度の同窓会事業については、昨年度とほぼ同じく継続していくこととなります。学術セミナーなど、色々と企画を練っていますので、是非多数の皆さんの参加をお願いします。又、緊



急時・代診医相談窓口はこのところ少しずつ問い合わせがあり、実際に機能し始めています。大多数の開業医は、自分の病気や怪我によりその日のうちから苦境に陥り、なかなか一人では対処できません。まず自分で身を守る努力をし、周りの友人らとのネットワークを日頃から心がけておくことが大切であり、その後、こうした同窓会の相談窓口を利用してみて下さい。大学側には協力していただけるようお話ししてあります。もう一つ新しい事業として、歯学部附属病院玄関壁面に我々卒業生のネームプレートを設置し、母校に学んだ証を残そうということが計画されています。できれば、同窓会30周年の区切りに当る今年度中に実行したいと思っております。

さて、国立大学独立法人化の動きはいよいよ本格化してきており、新潟大学歯学部も、大学院の充実、地域社会への貢献、社会から望まれる歯科医師育成としての学生教育等、生き残りをかけて懸命な努力を続けています。同窓会もできる限りのバックアップをしていきたいと思っております。本年度も、同窓会へのご協力をよろしくお願い申し上げます。

同窓会副会長就任の挨拶

加齢歯科学講座 野村 修 一（3期）



第2期目を迎えた神田正一同窓会長のご指名により、学内からの副会長の大役をお引き受けすることとなりました。前任の山田好秋教授は副学部長として大学ならびに歯学部改革で多忙を極めており、神田会長とは同期生で、学生時代にはテニス部の運営を一緒にやった仲の私に白羽の矢が立ちました。副会長としての私の役割は、同窓会と歯

学部改革で多忙を極めており、神田会長とは同期生で、学生時代にはテニス部の運営を一緒にやった仲の私に白羽の矢が立ちました。副会長としての私の役割は、同窓会と歯





学部との橋渡し役と理解しています。これまでの互いに理解し協力しあう関係が、より密になるように正確な情報を積極的に提供していきたいと考えています。

新潟大学は大学改革の大きな流れの中にあつて、今年度から運営組織が新しくなり、教育課程も Semester 制導入と21世紀を生き抜くためダイナミックに変わろうとしています。歯学部においては、歯学部を三つの大講座に改組するとともに、大学院歯学研究科を一つの口腔生命科学専攻に統合し、さらに医学研究科と共に医歯統合型大学院を平成13年度に概算要求しています。教官は大学院所属となり研究活動と大学院生の指導に従事しながら、歯学部学生の教育も兼担することとなります。同時に、歯学部附属病院では四診療科、二治療部に診療組織が改組されます。

こうした歯学部の現状と今後の展望については、花田晃治歯学部長ならびに河野正司病院長が歯学部ニュースやさまざまな機会を通じて説明されており、ご存知の同窓会会員も多いと思います。しかし、つい最近にも「大学院大学になって歯学部はなくなる」「開業する学内会員が急増する」といった根拠のないうわさが飛び交ったと聞きます。現在、歯学部内には本学卒業生の教授が5名おりますので、母校に関連する正確な情報を必要とするときには遠慮なくご連絡下さい。

また、このような改革のなかで地域社会に開かれた大学として、臨床、教育そして研究のすべての分野において、これまで以上に地域社会との連携が強く求められています。すでに、同窓会の皆様には社会人選抜大学院、臨床教授による学外臨床実習、病診連携などでお世話になっておりますが、なお一層のご協力を宜しくお願い致します。

さて、今年の3月には歯学部30期生が新会員として入会し、我々の同窓会も複数の世代の会員で構成される大きな組織となってきました。世代や職域によって同窓会に期待するものが違ってくるのは当然で、さまざまな意見を同窓会活動に反映していく必要があります。特に、これまで同窓会活動に必ずしも積極的とはいえなかった若い世代

や学内の会員には、もっと同窓会に関心を持ってもらいたいと願っています。その意味で今回の執行部に卒業が20期以降の先生が増えたことを心強く感じています。執行部の一員として、私自身もこれからの同窓会を見据えた活動に力を注いでいきたいと考えています。

同窓会本部のこれからのあり方について

赤坂長右(5期)



この度、副会長に就任した5期生の赤坂長右です。これまで同窓会では厚生担当理事、総務担当理事として携わってまいりました。理事会や評議会の場で自由に私見を述べていた私が、こともあろう

に副会長など務まらうはずもないと固辞したのですが、結局はお引き受けすることになりました。

お受けしたからには、他の副会長と共に会長を補佐し、会の発展のために粉骨砕身努力してまいりますので宜しくお願い申し上げます。

さて現在、当同窓会が置かれている状況は大変に厳しいものがあります。会費納入率の低下や各種同窓会事業への参加者数の低迷は、ここ数年顕著になってきています。毎年、予算編成時期を迎えると会計担当理事は頭を悩ませ、学術事業では学術担当理事や委員が参加者の動員に奔走することになります。

会員の皆様から会費をいただいて会を運営している訳ですからとどまる事は許されないでしょうが、時に歩みをゆるめて、会の魅力、会の求心力、会員としてのメリット…などについて考える事が必要だと感じています。

同窓会の魅力や求心力を高める策。それには会員のそれぞれが会費に見合った利益を得ることが第一です。なかなか良い手だては見つかりませんが、全国に広がっている会員が会員としてのメリットを得る方法として、支部活動に交付金を助成





することはいかがでしょうか。全ての都道府県に支部が設立されていることが前提なのは言うまでもありません。

本部はなるべく事業を縮小し、その分を支部交付金に当て、充実した支部活動を本部を通じて全国に発信し、支部同志のコミュニケーションがだんだん密になり…そうすると、今にも増して情報の収集・管理が必要になりますが、この情報交換の要としての役割を担うことが本部の使命ではないかと思えます。

今後、理事会・評議会などの協議の場で検討すべき課題ですが、一般の会員諸氏におかれましても、ご一緒にお考えいただければ幸いです。

同窓会副会長に就任して

多和田 孝 雄（6期）



再任された神田会長の指名を受けて、今期は同窓会副会長の職務に就くことになりました。私の同窓会活動への参加歴は長く今年で19年目になります。始めの14年は学術理事を勤めさせていただきました。

が、直近の2期は前梶川会長及び現神田会長の執行部で専務理事として、同窓会活動に参加させていただきました。

私は同窓会の活動が以下に述べる3つの大きな骨格から成り立っていると認識しております。1番目に挙げられるのは、会の事業の根幹をなすもの、即ち、会の維持と会員サービスの為の事業です。会の維持に関しては同窓の会員の方々に会費をご負担願っておりますし、大勢の役員もほとんどボランティアに近い状態で頑張っております。同窓会事業の中でも最大のウェイトを占めているのが、会員サービスの為の事業であり、学術講演会や講習会の開催、会員名簿の発行、同窓会誌の発行、慶弔関連の福利厚生事業、代診派遣事業等があります。2番目に挙げられるのは母校の歯学部との協調協力関係の増進です。我々のルーツと

も言える歯学部も今は、歯科医師需給問題や大学全体としての独立行政法人化の荒波の中で、大きな岐路に立たされていると聞いております。正にこのような時こそ同窓会は学部可能な限りの協力をすべきであると心得ております。一方、学部からは同窓会主催の学術講演会に講師を派遣していただいておりますし、付属病院玄関の側壁に同窓生名簿の掲示を提案されております。3番目は同窓会の対外事業とも言える他歯科大学及び歯学部同窓会との交流です。その主たるものが「全国歯科大学同窓・校友会懇話会」と「新設国立大学歯学部同窓会連絡協議会」です。これらの会議においてなされる報告や協議が我々の同窓会運営には大きく役立っており、今後も大事な情報収集の場として積極的に参加していきたいと考えております。

私は上述の同窓会事業の継続と発展は神田会長の路線であると考えておりますので、その意向に添うように精一杯の努力をしていきたいと思えます。

平成12年度同窓会総会報告

専務理事 深 町 博 臣（14期）

2000年4月15日（土）、歯学部附属病院前の桜が満開の中、県支部総会に引き続き午後12時40分より平成12年度の新潟大学歯学部同窓会総会が行われました。20数名の出席者の中、長谷川裕亮先生が議長を担当しました。

二期目となる神田正一会長の挨拶の後、各担当理事より事業報告が行われました。昨年度は、会費の自動振り込みシステムの開始、代診紹介窓口の設立、第一回支部長会議の開催など新規事業も多く、また秋には国歯協の当番校も務めました。

続いて、今年度の事業計画が討議されました。学術からは、今冬に予定されている「歯科用レーザーについて」、「CAD/CAM」、「診療室のデジタル化」という3つのテーブルセミナーにつき説明がありました。また、今年度中の実施を予定している「歯学部附属病院玄関脇の同窓生ネームプレ





ート設置」に関して、渉外担当理事を中心に具体案が検討されました。さらに新役員の承認など、その他の議事に関しましても、終始和やかな雰囲気で行われ、約1時間半の総会は終了致しました。

また、午後3時より、同窓会主催の学術講演会が開催されましたが、今年は高木律男教授より「地域基幹病院口腔外科の病診連携における役割」という演題でご講演を頂きました。さらに、講演会終了後には、学生時代の思い出深い亀萬にて懇親会が行われ、懐かしの味と雰囲気を楽しみながら親睦を深めました。

口腔外科学第二講座 高木律男教授の講演を拝聴して

「地域基幹病院口腔外科の病診連携における役割」

第一補綴学講座 櫻井直樹 (17期)

平成12年4月15日土曜日、新潟大学歯学部講堂において、口腔外科学第二講座高木律男教授より、「地域基幹病院口腔外科の病診連携における役割」と題したご講演を頂きました。私自身が補綴科に所属しているため、このようなテーマでの講演を聴く機会が少なく、興味深く聴かせて頂きました。近年、少子高齢化に伴い、全身疾患を有する患者さんの歯科治療、腫瘍系疾患の罹患率の増加など疾病構造が変化しており、地域基幹病院での口腔外科の役割が今後益々重要になっていくとのことでした。

講演の内容は、現在の口腔外科の受診状況に関する報告がありました。さらに具体的な症例を提示して、地域基幹病院口腔外科と一般開業医の先生との連携に関しての現状とビジョンに関して述べられました。

土曜日の午後3時という時間にも関わらず、学内、学外の多くの同窓生の参加があり、これからの歯科医療の病診連携に対する関心の高さを感じました。

ご多忙の中、ご講演をして頂いた高木律男教授には心より感謝申し上げます。

第43回全国歯科大学同窓・校友会懇話会に出席して

同窓会会長 神田正一

日時：平成12年7月1日(土)

午後3時～5時30分

場所：ホテルオークラ(東京)

当番校：明海大学歯学部

第43回全国歯科大学同窓・校友会懇話会が、明海大学歯学部の主催により東京で開催されました。今回は、深町専務理事と2人で出席してきました。蒸し暑い東京の街を少し歩くと汗が噴き出して来、ようやく会場にたどり着きました。

午後3時から、当番校の明海大学歯学部の司会により会議が開始されました。主催校明海大学歯学部同窓会会長の挨拶に始まり、日本歯科医師会会長ら、来賓の挨拶があり、続いて全歯懇会議が行われました。特別講演として「歯科保健・医療の現状と21世紀の課題」というテーマで、厚生省健康政策局歯科保健課長 瀧口 徹先生(本学6期生)が、これからの歯科医療の展望についてお話されました。歯科疾患・歯科診療の特性として①多発性(国民病)②不可逆性と難治性③予防可能性が高い④年齢特性⑤長期的維持管理の重要性、があり診療においても医科との違いを指摘された。医療供給体制(需給バランス)については入口出口、定年制など色々問題があり、厚生省だけでなく文部省との共通問題でもあるとされ、又、卒後臨床研修制度、介護保険についても言及された。又、医療費動向として、医療費の3要素・老人医療費の特性について話され、これからの歯科界は少子高齢化により三重苦になる可能性も考えられるとのことだった。瀧口先生には、昨年秋、国歯協において講演いただいたが、この度また歯科全般に渡り幅広くお話しを、聞くことができました。

その後、協議にうつり次期当番校に朝日大学歯学部、次々期当番校に東北大学歯学部が選出され、滞りなく会議が終了しました。





昭和53年、第1回の全歯懇が開催されてから22年、毎年2回開催され、様々な討議が重ねられてきましたが、この会の意義も少しずつ変化していると思われ、年2回の開催の再考も必要な時期になってきたように感じられました。

平成12年度新設国立大学歯学部同窓会連絡協議会に出席して

専務理事 深 町 博 臣 (14期)

日 時 平成12年7月2日 午前9時～12時

場 所 東京シティーホテル

当番校 岡山大学歯学部同窓会

例年通り、第43回全歯懇が開催された翌日に岡山大学の主催で国歯協が開催されました。前日から真夏を思わせる暑さの中、全国10大学から23名の参加がありましたが、本校からは神田会長と私の2名が出席しました。

当番校の難波秀樹会長挨拶の後、出席者の自己紹介に続き、講演、協議と約3時間に涉り、会は滞り無く進行しました。

○講演「時局問題」 大阪大学歯学部同窓会 玉利行夫会長

長年に渉る日本歯科医師会代議員のご経験に基づき、ここ10年来の日本歯科医師会会長選挙の経緯や保険点数改正、歯科衛生士修業年限改正、国立大学の独立行政法人化、等について、1時間弱お話を伺いました。

〈かかりつけ歯科医初診料・再診料について〉

今回の保険点数改正において2%の点数アップがあったが、その8割に当たる1.6%がかかりつけ歯科医初診料・再診料の財源として使われている。それに対応して、日本歯科医師会はポスターを作成し、3月末までに各都道府県歯科医師会宛に送付したが、内容に誤解を招きかねない表現があるとの指摘を受け、ポスター配布を凍結した。その後、さらに検討を重ね、ポスターの文言に修正を加えた。また保険請求に必要な治療計画説明書についても、歯科医師が記入しやすく、かつ患者も理解しやすい平易な「治療計画のお知らせ」とし

て作成した。作成に当たり特に苦慮した点は2点ある。一つは治療期間、もう一つは、いかに文書を簡素化できるか、という点であった。治療期間に関しては、「概ね1ヶ月以内」と「概ね1ヶ月以上」の2種類に分けたことで、短期の処置の患者でも請求できる形式とした。また、文書に関しては、主症状等という項目を設け、そこに主訴等を書き添えることで「文章による情報提供」という条項をクリアできる書式とした。

この点数改正に伴い危惧される問題は前医批判である。なぜなら、A歯科医院の文書を持ってB歯科医院を訪れるケースが生じるとされるからである。したがって、文書が残るといことと、その文書が他の専門家の目に触れる可能性があるということの2点を肝に銘じておく必要がある。

○協議

〈歯科医師会および地域医療とのかかわり〉

県歯科医師会会長選挙の対応は県支部に任せている大学が多い。地元歯科医師会に対しては、ほとんどの大学が中立的立場をとりながら、友好的、協力的に支援している。

〈次回当番校および次々回当番校の確認〉

次回 広島大学歯学部同窓会。11月12日(日)名古屋近辺で開催予定。

次々回 東北大学歯学部同窓会。

2000年度「歯学部6年生進路相談会・懇親会」

渉外担当理事 鈴木 一郎 (11期)

歯学部6年生に対する進路相談会と懇親会を7月14日(金)に歯学部大会議室にて開催した。参加者は6年生が54名、そして同窓会からは三役(神田、多和田、赤坂、深町)、渉外理事(鈴木、藤巻、峯尾)、その他学内理事(田口、岡田、新美)の10名が参加した。

鈴木司会進行により、まず同窓会三役から同窓会の活動概要や最近の歯科開業の状況などについて説明があった。次いで開業されている若手同窓生からアドバイスをお願いするというこ





1999年度 第2回同窓会・教授会 定期協議会開催

渉外担当理事 長谷川 裕 亮（2期）

出席者：花田学部長、河野病院長、野村教授、
神田同窓会長、神保副会長、多和田専務
理事、長谷川渉外担当理事

日 時・場所

平成12年2月23日（水）7：00 P m～
新潟大学歯学部学部長室

【神田会長挨拶】

3月で現執行部の任期がおわり、新執行部となります。

4月15日（土）に本年もまた、同窓会総会を新潟歯学会と同時開催する。総会の講演講師は口腔外科高木教授にお願いした。

この度、山形、神奈川支部が出来て12支部となった。

また、派遣医の問題は、まだ体制は整っていないが一つ一つ整備して行きたい。

卒業生ネームプレートの病院内設置の可能性について、お伺いしたい。

県内、特に新潟市では歯科開業医は厳しい情勢がさし迫っている。1日当たり、一か月当たりの患者数が減少し、深刻な事態となって来ている。

大学改革について、現在どこまで進んでいるのか、お聞かせ願いたい。

【協議】

まず、多和田先生より、新設国立大学歯学部同窓会連絡協議会（国歯協）が昨年11月25日新大同窓会主催で東京に於いて開催されたが、内容についての報告がなされた。

同会に於いて、本学6期生厚生省健康保険局政策局歯科保健課長・瀧口徹氏を講師に迎え、「21世紀の歯科保険医療の展望」という演題にて講演を戴いた旨報告された。（詳細は同窓会誌20号参照）

次いで、花田学部長より本年から3月23日に行われる卒業式の際、卒業生祝賀会、謝恩会が一つになり6：00 P mより謝恩会として行われる。同

今年と同窓会理事でもある21期生の岡田朋子氏にその役を引き受けていただいた。岡田氏は卒業後第一口腔外科に入局、現在は新潟市内で家業を継ぎ開業されているが、アルバイトや常勤歯科医を雇用されてきた経験から、臨床に従事する者の心構えといったことについて深町専務理事とともに少々辛口のアドバイスをしていただいた。

その後、赤坂副会長の乾杯の発声により懇親会へと移行した。今年度は卒業教育のための総合診療部が立ち上り、現在6年生は1年目の研修医と隣り合わせて臨床実習を行っている。一口腔単位による臨床実習は本学の卒前臨床教育の大きな特徴のひとつであるが、学生にしてみれば自分たちがやっている臨床実習と研修医教育の差異がまだわかりにくいようである。また、卒業進路の今ひとつの選択肢である大学院も今年は募集が1ヶ月ほど繰り上がって夏休み中となった。夏休み中に学外の様子も見て卒業後の進路を決めたい学生にしてみれば今年は何とも悩ましい選択となっているようである。

最後に幹事の反省をひとつ。今年は「人数×酒量」の読み違いからビールが不足してしまい、途中で急遽追加したものの結局例年より早い時間に終了することとなってしまった。学生の皆さんごめんなさい。





日 2 : 30 P mより卒業証書授与式があるので、その後同窓会入会式を行ってはどうかとの話があり、同窓会では30分程度の同窓会入会式を行う事になった。

(1) 同窓会ネームプレートの歯学部病院内掲示について

歯学部病院の玄関の壁に歯学部同窓生の期別の名前を掲示する事に関し教授会・同窓会の協力を実現へ向けて進んで行く事になった。

(2) 同窓会員への学術情報の提供について

同窓会側より全国の同窓生からの臨床ケースについての質問を受け付けて回答してもらえないかと大学側へ依頼がなされた。

学部長・病院長より情報担当専門の助手の先生を一人決めるので、そこを窓口になれば可能であるとの回答がなされた。

病診連携の一つの形としてやって行きたい。利用した同窓生は僅かだが実費を払う。

河野病院長より病診連携として、一人の患者を取り合いせず、病院が出来る所をやって患者を再び紹介医院に送り返す方式を今後は進めて行きたい事 (e x. 歯槽堤吸収著明の患者の歯槽堤形成術を大学で行い、義歯は開業医で製作する。)

今後は、歯学部病院のオープン化を進めて行きたい。

平成12年度第 1 回 歯学部教授会・同窓会定期連絡協議会開催

渉外担当理事 峯 尾 総 一 (16期)

日 時 平成12年 8 月 2 日 午後 7 : 00 より

出席者

教授会；花田歯学部長、河野病院長、野村教授、山田教授

同窓会；神田会長、多和田副会長、赤坂副会長、深町専務理事、斎藤渉外理事

例年、夏・冬の 2 回、教授会と同窓会の連絡協

議会が開催されているが、本年も上記日時にイタリア軒脇の「しまや」にて滞りなく開催された。

深町専務が司会となり議事進行がなされた。まず神田会長より、本年より同窓会の理事に多少の入れ替わりがあったが、これまで同様よろしくお願ひしたい由の挨拶が行われた。また同時に、最近の、出所不明の学部の将来に関する穏やかならぬ風聞に関する件と、歯学部附属病院玄関に設置準備中のネームプレートに関する件について、情報提供と、お力添えいただきたいとの要請が教授会になされた。

ついで、花田歯学部長より、同窓会の役員には大変なこともあるが母校のためにがんばってほしい由のお話があった。また、噂については、一人歩きしている観があり、内容については事実と違うので惑わされないようにとの指摘があった。

多和田副会長の乾杯の発声によりその後歓談となったが、その間もさまざまな問題に関して協議が行われた。特に風聞に関しては、今後も無責任なさまざまな噂が出てきそうなので注意すべきとの意見がだされた。ネームプレートに関しては、噂に影響されずに、粛々と実行されるべきとの意見がだされた。

最近、本学の卒業生の中からも歯科医師会の内部で役職を得たものが増えつつあるが、これらの人たちと歯学部側が意見交換することは、双方に有意義なことではないかとの意見が同窓会側からだされ、教授会側も基本的に諒とされた。歯学部大学院は今後変わっていくので、活性化のため同窓会にも協力してほしいとの話しが教授会側よりあった。

最後に河野病院長より、歯学部と同窓会は母校を活性化発展させていくために、今後ますます協調・協力していくべきであろうとの言葉があり閉会となった。

とても真摯な意見交換が行われたが、最初から最後まで和気藹々とした、楽しい雰囲気でした。

